

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
席員
主研究員7 実例「長野市」の検証(続)
(8)就農地域

VI 農業のもう一つの役割

筆者は、農業の果たす役割の前提は食の供給であること、そしてその源流である日本農業の歴史や現状、そしてそれを取り巻く環境についてここまで述べてきた。

しかし、農業や農地の果たす役割は、単にそれだけにとどまらず、さらに大切な役割を担っていることを忘れてはならない。

ここでは、農地や農業集落のもつ、もう一つの役割や効果を簡潔に挙げたい。その一つは「災害抑止効果」である。周知のとおり、日本は温暖湿潤で急峻な地形に富んだ島国である。

それがために、毎年のように集中豪雨や豪雪といった自然のもたらす災害も多く、土壌の流出や洪水による被害も各地で多発する。それに対し、一時的に雨を貯留し、排水路にゆっくり流すことで、急激な流量の増水を抑えるなど、一定の抑止力を発揮するのが田畑である。

水田や果樹園は単に農地であるばかりではなく、国土保全上、大変重要な役割や手段を担っており、治山治水上のダム機能を持つ田畑の価値は毎年8兆円とも試算されているのである。

次に「水質、大気の浄化機能」である。特に水田にあつては、微生物が水の中に含まれる有機物を分解し、さ

らに作物が窒素を吸収することで、水の浄化機能を持ち、同時に稲は光合成を行うことで大気中の二酸化炭素を減らし、酸素を増やし、加えて亜硫酸ガスや二酸化窒素等の人体に有害な物質を吸収しながら、大気の浄化機能を発揮するのである。

また、田畑には「気候緩和機能」もある。水田には水面からの蒸発、そして果樹や稲の葉からは蒸散の効果によつて、気温の上昇抑止効果がある。

そして水田から吹き抜ける涼しい風は、街に向かつて天然クーラーの役割を果たしているのである。

そして、一方で水田は、その周辺水路も含めてさまざまな生き物の住処(すみか)となり、豊かな生態系が保たれる機能も持ち合わせている。

加えて、忘れてならないものは、「癒しの効果」である。一面の若草色から黄金色に変化する四季折々の田園風景は、私達日本民族

の象徴であり、共通のふるさとの情景と安堵(あんど)の誘いに満ちている。

そしてその周囲に形成される集落の住民により伝承された「祭祀文化」を忘れてはならない。彼らは、春の祈年祭にはじまり、秋には新嘗祭(にいなめさ)を開催することで、神に豊作(五穀豊穰)を祈願し、収穫を感謝する地域文化を遠く律令の昔から伝承し、今日につないでいる。

これらの大切な役割や効能を考慮した時、農地荒廃の増殖は、単に自給率の低下をまねくだけでなく、自然界のバランスを崩壊させ、日本文化を脆弱化し、果ては日本人の心をも消滅させる危惧を予見させるものであることを私達は忘れてはならない。

(続く)

清水 秀幸氏(しみず ひでゆき) 1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒、同年守谷商会入社、2006年6月取締役就任。各支店長、営業本部長を経て、退任。13年7月にさくら都市総合研究所を設立し、現在社長。